総括　「江南文化と日本」における研究発表の概観

郭 南 燕

国際日本文化研究センターと復旦大学日本研究中心は、2011年５月27日から29日まで、「江南文化と日本―資料・人的交流の再発掘―」をテーマとするシンポジウムを中国上海の復旦大学で共催した。シンポジウムの企画、論文集の編集を担当する一人として、今回の研究発表について私見を述べさせていただく。

日文研が実行している海外の日本研究を推進する３年計画（2010～2012）のテーマは「資料・人的交流の再発掘」である。今回の海外シンポジウムは、上海という地理的位置と、復旦大学の胡令遠教授の人的ネットワークと、日文研の人脈を利用して、江南地方と日本との交流史に関する研究を深めることを目的とした。

基調講演を含む発表者は29人で、司会とコメンテーターは24人（うち４人は発表者でもある）で、合計49人が活躍している。このシンポジウムにおいて、人的交流、物的交流に関する資料の再発掘を示した研究成果は、学術レベルの高いものであった。基調講演の末木文美士氏の「日本における江南仏教の受容」は、中国の主流ではない江南地方の仏教を学んだため、流行にとらわれずに、それを自由に改編して日本化し、理想的な形態へと飛躍できた最澄を含むいくつかの例を挙げて、日本仏教における中国文化の受容の複雑さを分析した。また、日中間の仏教概念の違いのため、議論が噛み合わない例を取り上げ、学問の世界だけではなく、政治、外交的な問題も起こりうるとして、相互の意味をまず確かめることが大切だと言及している。仏教思想の研究成果を、日中関係の発展に結びつけるこの提言は、基調講演にふさわしいものであった。

日本における中国研究の基礎情報は中国在住の研究者にとって大切である。伊東貴之氏の「日本における東アジア海域交流史研究の現状と動向」は重要な情報源である。氏は、日本史の相対化と、従来の国家や王朝を中心とする視点から離れ、多様な「地域」や「海域」の視点からの中国史、朝鮮史の考察が日本で行われていること、アジア的な視点に立って、古代日本と東アジア、中世の対外交渉史と東アジア海域史、近世日本の対外関係史、文化交渉史、南洋史、貨幣史、鉱山史、貿易史、経済史、商業史などを行った中堅研究者の業績をリストアップしている。さらに、文部科学省・科学研究費補助金によるプロジェクト「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―」のメンバー137名が、歴史・思想・文学・美術・芸能・仏教・考古・建築・船舶・数学などの諸分野において、東アジア海域全体の交流と日本の伝統文化との関係を総合的に研究していることを紹介した。

日本における中国研究は世界的に高いレベルだといわれている。その一端をうかがわせる発表がいくつも行われたことは喜ばしい。また、中国、台湾側からも実証による優れた研究成果が披露されている。浅学の私から見れば、今回の論文を二つのグループに分けることができる。すなわち、資料発掘によって新しい学説を提起するものと、現存資料を読

み直し、新しい解釈を試みるものである。

1. 資料発掘による新学説

江南地方と日本の物質的交流に関して、高津孝氏の「薩摩塔と碇石―浙江石材と東アジア海域交流」は、岩石学的分析に基づき、浙江産の石材によって造立された薩摩塔の性格、碇石の分布などを通して、宋元期の日中交流の解明を目指している。山内晋次氏の「日本史とアジア史の一接点―硫黄の国際交易をめぐって―」は、古今東西の史料と文学作品を駆使し、宋代に明州を通じて行われた日本から中国への大量の硫黄輸入の目的、時期、ルートを考証し、アジア規模の「硫黄の道 the sulfur road」を描き、広域的な歴史研究の必要性を呈示した画期的な論文である。范金民氏の「十六至十九世纪前期中日贸易商品结构的变化―以生丝、丝绸贸易为中心―」は、16世紀から19世紀までの駐日貿易商品構成の変化を丹念に考察し、先行研究の不足を補っている。

文化交流に関して、郑巨欣氏の「从夹缬的东传及流变看江南文化与日本的渊源关系」は、染色の工芸「夾纈」の歴史と制作のプロセスを解説し、夾纈が江南地方の睦州で生産され、皇帝の命令で全国に広がったことを論証したうえで、古代日本は中国の夾纈の影響を受けたが、近代では日本の「板締め」が中国に影響を与えたのではないかと論じ、学説を一新した。榎本渉氏の「元末江南の士大夫層と日本僧」は、豊富な史料を利用し、今まで重視されなかった元末の士大夫と日本僧との頻繁な交流を考証し、仏教以外の様々な文化の形態が宋元代の江南から日本へ伝えられた歴史の一側面を明らかにした。

巴兆祥氏の「清代江浙方志东传日本述略」は、膨大な資料を考証し、明清時代に中国から日本に輸出された多量な地方誌の数、書名、渡航日、出港日、船主名、商人の本籍などを解明した。陈正宏氏の「十九世纪中叶日本画家田结庄邦光的上海游记―及其与沪人笔谈资料―」は、田結荘邦光が上海を訪問した時の筆談資料を、明治初期の上海の生活と芸術を反映した貴重な材料だと評価している。陈氏の研究は、本論文集所収の周保雄氏の評論によってさらに補足されている。

陈祖恩氏の「岸田吟香与海上文人圈―以1880年代中日文化交流为中心―」は、岸田吟香の上海における活動をつぶさに調査し、当時の中日文人の交流を明らかにした。王宝平氏の「明治前期に来日した浙江商人王惕斎の研究」は、書籍、資料、新聞記事を丁寧に調べ、寧波出身の商人王惕斎の日本における活動、事故に遭った後に日本人に助けられた経験、日本社会や日中交流に関する著述、歴史、法律、医学などの多くの書籍刊行に対する助成、中国の財政改革への貢献を総合的に論証した。

細川周平氏の「戦時下の中国趣味の流行歌」は、戦場に送られた兵卒の孤独と郷愁と銃後の人々の心情を伝えた流行歌に着眼し、中国らしさを表現する昭和のヒット「支那の夜」や「チャイナ・タンゴ」や「蘇州夜曲」にみられる日本、中国、欧米の要素を分析し、流行歌が国境を越えていたことを指摘している。陳凌虹氏の「日中近代演劇のネットワーク―東京・京都と上海の間」は、新発見の史料に基づき、1900年代の上海を中心とする新劇の創始者任天知と東京、京都の演劇界との接触が中国の新演劇に与えた影響を検討している。

2. 現存資料の再検討

現存する資料を再検討して新しい解釈を施す論文が多くあった。張愛萍氏の「呉越の『禹祭』から利根川の『泥祭』まで―中日の治水神話源流考―」は、史料や先行研究を使い、中国の大禹の治水神話が日本において展開した可能性を論じる。井上章一氏の「『干蘭』か『高床』か―日中建築比較論のこころみ―」は、日本で７、８世紀に一旦姿を消した西南中国の高床住居「干蘭」に似た建築が、平安時代に入って再び現われ、その様式は、黄河流域の基壇建物と長江流域の高床建物を融合したものだと見る。そして平安時代の宮廷の生活様式を支えた日本建築の個性にある中華文明の要素を通して、従来の「国風文化」論と違う観点を打ち出している。

高橋公明氏の「テキストのなかの明州」は、日本の史書、日記、文学、演芸などにおける「明州」（寧波）という地名の使用法、社会的伝播、記号的な意味を探求する。许金生氏の「从《碧岩录》看禅对日本古典园林的直接影响」は、『碧巌録』の字句がどのように日本の古典庭園に取り入れられたかを考察する。

韩东育氏の「关于朱舜水的“东夷褒美”」は、朱舜水の思想を分析し、朱の日本に対する評価の背景と、江戸日本に与えた影響を論じる。徐興慶氏の「他者としての異文化論説―張德彝（1847–1918）の『航海述奇』をめぐって」は、先行研究を丹念に整理した上で、日本の日常生活、風土人情などを詳細に記録していた張德彝が、固有の「華夷観」にこだわりつづけたことを明らかにした。徐静波氏の「幕末・明治时期日本人对上海认识的轨迹―从高杉晋作的《游清五录》到远山景直的《上海》―」は、明治期の日本の文化人の書いた上海見聞を中心に、日本人が上海をいかに観察していたかを紹介する。

劉建輝氏の「水と女の戯れ―谷崎潤一郎の中国江南―」は、日中間の近代ツーリズムの隆盛期に中国に渡った谷崎が江南で中国文人の「風流」を追体験し、「水」と「女」の関係を通して、独自の中国発見を遂げたと論じる。施小煒氏の「芥川龍之介における『江南』」は、芥川の中国訪問前後の心情、江南地方に抱く理想と現実の落差に着眼する。胡令遠氏、王盈氏の「周作人の日本研究における江南文化の意義」は、周作人が常に故郷紹興との比較を通して、日本の日常生活、食生活、文学芸術を理解していたことを述べる。

ほかに、本シンポのテーマとは直結しないが、呂静氏、程博麗氏の「漢晋時期における名謁・名刺についての考察―近年出土謁刺の分析をめぐって―」は、先行研究を紹介し、1970年代以来出土した史料に基づき、名謁と名刺の形状、内容構成、使用状態、社会関係などを実証的に考察した研究成果である。また、南京地方の文化に関する二本の論文は読み応えがある。陈蕴茜氏の「国家权力、城市住宅与社会分层―以民国南京住宅建设为中心―」は、国民政府時代の南京の住宅計画が人々を階層によって分け、国家権力が都市空間をコントロールしていたことを論証する。李里峰氏の「生死之间：多重记忆维度中的雨花台」は、南京の雨花台に賦与された表象性が時代とともに変化していることを考察する。

司会とコメンテーターの５人から評論文が寄稿されている。李尚全氏の評論は、張愛萍、王勇（本論文集未収録）、榎本渉３氏の論文を批評すると同時に、三者の論文の扱う時代的背景を整理する。趙昌智氏の評論は、江南文化の代表である揚州と日本との交流を歴史

に辿る。郭洁敏氏の評論は、江南の重要な近代都市上海と日本との交流を概観する。

周保雄氏の評論は、陈正宏氏の田結荘邦光に関する論文を補遺、訂正、発展させる学術的価値の高いものである。赵建民氏の評論は、シンポジウムを概括し、新しい知見を提供した論文を取り上げ、シンポジウムの成果を評価して、研究発表にみられる限界と将来性をも示唆する。この評論を「総括」として本論文集に位置づけたい。

近年、旧来の「中華帝国」とその周辺諸国といった国家間の枠組みから離れて、「国家」単位ではなく、「地域」の具体的な交流の様相を考察する研究動向が、日本と中国に見られるようになっている。今回の研究発表の中で、中国と日本の両国を超えた視野をもつ伊東、井上、山内、榎本、細川諸氏の発表は興味深い。また、文献の発掘と考証だけではなく、染色（鄭）、音楽（細川）、岩石学（高津）などの知見と考察方法を提供した発表も印象的である。

会議中、活発な討論があった。周保雄氏のコメントに対して、陈祖恩氏から批判があった。それを謙虚に受けとめた周氏は、研究論文に等しい優れた評論を寄稿してくれた。また、細川氏が見せた写真に映った日本兵を目にした途端、拒絶反応を示し、発表中の細川氏を戸惑わせた発言があった。写真を研究資料として分析する立場と、拒絶反応も含めた心情を互いに理解することも、参加者にとって新しい課題となった。戦争も文化交流の一部分だという赵建民氏の発言は記憶すべきであろう。

本論文集は、発表論文をすべて採用する方針を取っているため、取捨選択をしていない。論文に対する価値判断は、すべて読者に任せる。